

マリオ・マルツィ : サクソフォン

シモーネ・ザンキーニ : アコーディオン



私たちのディオは、明らかに“大衆音楽”といわれる音楽分野から始まりながらも、やがて、自身の体験を織り交ぜ、ろ過しながら、より普遍的な定義付けにまで至ったアーティストたちの音楽を広く世に知られることを願い誕生した…そう、ひとたび耳にすればそれとわかる、他の追随を許さない、より洗練された筆跡で書き上げられた音楽を…

プログラム

- ・ エルメート・パスコアール
- ・ リシャール・ガリアーノ
- ・ ピシンギニヤ
- ・ アストル・ピアソラ
- ・ コスマ
- ・ シモーネ・ザンキーニ
- ・ ジャンルイージ・トロヴェージ
- ・ ネッド・ローゼンバーグ
- ・ エグベルト・ジスモンチ
- ・ ハヴィエル・ジロット
- ・ ジョヴァンニ・ソッリーマ

マリオ・マルツィ (Mario Marzi)

イタリア・ペーザロのロッシーニ音楽院 (Conservatorio Statale di Musica "G. Rossini") でディプロマを取得、その後、フランス・ボルドーの音楽院のジャン・マリー・ロンデックス (Jean-Marie Londeix) の下で、研鑽を続け、4つの国際コンクールと9つのイタリア国内のコンクールで優勝を重ねる。

ソリスト及びオーケストラとの活動としては、とりわけ、“ミラノ・スカラ座管弦楽団” (Teatro alla Scala) と同団を母体とするオーケストラの“スカラ・フィルハーモニー管弦楽団” (Orchestra Filarmonica della Scala) との共演が長く、20年以上に及んでおり、特に、リッカルド・ムーティとはソリストとして何度も共演している。また、ズビン・メータには、“フィレンツェ五月祭管弦楽団” (Maggio Musicale Fiorentino) のツアードにソリストとして招かれている。

そのほか、“トリノ RAI 交響楽団” (Orchestra Sinfonica Nazionale della Rai di Trieste) 、“サンタ・チェリーリア国立音楽院管弦楽団” (Orchestra dell' Accademia Nazionale di Santa Cecilia) 、“ヴェネツィア・フェニーチェ座管弦楽団” (Teatro alla Fenice di Venezia) 、“スイス・イタリアーナ管弦楽団” (Orchestra della Svizzera Italiana) をはじめとするイタリア国内外の数々のオーケストラと、ソリストとして共演を続けている。

世界的に名高い指揮者との共演機会も多く、C. M. ジュリーニ、G. プレートル、L. マゼール、L. ベリオ、S. ビシュコフ、C. アバド、W. サヴァリッシュ、チョン・ミョンフン、G. ドウダメル、R. シャイー、D. ハーディング、A. パッパーノなどと共に演を重ねており、ニューヨークのカーネギーホール、ウィーンの楽友協会ホールをはじめ、世界屈指のホールでの演奏機会も多く、また、日本においても、サントリーホール（東京）やシンフォニーホール（大阪）などでも演奏している。

マルツィは、20世紀の音楽作品にも熱心に取組んでおり、当代サクソフォンにとって意義深い幾つかの作品が彼のために献呈されている。また、室内楽の分野における活動も精力的に取り組んでおり、特に、ミラノのスカラ座管弦楽団のソリストを中心に結成された“スカラ室内管弦楽団” (Ensemble Strumentale Scaligero) や、自身をリーダーとするトリオ“タンゴ・イ・アルゴ・マス” (Tango y algo mas) では、何度も来日し、好評を博している。そのほか、アコーディオンのシモーネ・ザンキーニ (Simone Zanchini) とのデュオやピアノのパオロ・ザンニーニ (Paolo Zannini) とのデュオなど、長年多くのグループで活動を続け、クラシックはもとより、現代音楽やタンゴ、ジャズなどの作品の演奏でも高い評価を受けている。

国内外の国際音楽フェスティバルやサクソfonフェスティバルにも参加を続けており、そうした中で、国境を越えた友情で結ばれたサクソfon・カルテット“ブロス・カルテット” (Bros Quartet) を、北アイルランド出身のジェラルド・マクリスター (Gerard McChrystal) 、スペイン出身のアントニオ・フェリペ・ベリハール (Antonio Felipe Belijar) 、ポルトガル出身のジョアン・ペドロ・シルヴァ (João Pedro Silva) と結成したほか、ギターのジュリオ・タンパリーニ (Giulio Tampalini) とのデュオや、クラリネット/サックスのアキーレ・スッチ (Achille Succi) とのデュオ、さらには、作曲家で、マルチ演奏家のステファノ・イアンネ (Stefano Ianne) とパーカッション奏者のステファノ・カルヴァーノ (Stefano Calvano) とのトリオ“イアマカ” (IaMaCa) など、新たなグループでも活発な活動を展開し、コンサートのみならず、録音活動も行っている。

彼のCDは、BMG、Sony Classical、EMI、Stradivariusなどのレーベルから発売されている。クラシック・サックスのスタイルのCDとしては、ソリストとして、グラズノフのサクソフォン協奏曲や、ミヨーのスカラムーシュなどの作品を取り上げたもの(ARTS)、また、ピアノとのデュオでもフランスの作曲家の作品を取り上げたもの(Stradivarius)などがある。現代音楽の分野では、ピアノとのデュオで、イタリアの作曲家の作品を取り上げたもの(Stradivarius)や、ピアノとアコーディオンとのトリオでバルトークや

東欧の民族舞曲、リゲティなどを取り上げたもの(LIMEN MUSIC)などがある。演奏活動同様に、ラテンやジャズなどクラシックの

枠にとらわれない作品の録音も数多く行っており、ピアソラの“リベルタンゴ”など来日公演でも度々演奏され、好評を博している作品を録音したもの(Stradivariusなど)をはじめ、即興で彩るバッハや、ミニマム・ミュージックなど、異なるグループ、スタイルでさまざまな録音を楽しむことができる。

奏者としての活動のほかに彼は、後進の指導にも熱心で、イタリア・ミラノの“G.ヴェルディ音楽院”(Conservatorio Giuseppe Verdi di Milano)で教鞭を執っているのをはじめ、イタリア各地のみならず、オポルト(ポルトガル)、アムステルダム(オランダ)、フランクフルト(ドイツ)、デンバー(アメリカ)、北京(中国)など、世界各地でも毎年マスタークラスを開催しているほか、“アドルフ・サックス国際コンクール”をはじめとする国際的なサクソフォンコンクールにおいて審査員を務める機会も多い。

また、イタリアのゼッキーニ出版社から、サクソフォンの歴史から技術までを網羅した専門書“il saxofono”(伊語)を、2009年に出版している。

シモーネ・ザンキーニ(Simone Zanchini)

シモーネ・ザンキーニは、現代音楽、アコースティック、電子音楽、そして、実験的な音色から流行に洗練された音楽まで、即興的要素に対する個性的なアプローチで探求する、国際的感覚の革新的、且つ、興味深いアコーディオン奏者の一人。

イタリア・ペーザロのロッシーニ音楽院のマエストロ・セルジョ・スカッピーニ (Sergio Scappini) の指導の下、クラシック・アコーディオンについて賞賛をもってディプロマを取得。ジャズ、クラシック、現代音楽、即興など、多様なジャンルのグループと活発なコンサート活動を繰り広げる多才な奏者。

クルゾーネ・ジャズ (Clusone Jazz)、ウンブリア・ジャズ (Umbria Jazz)、ティヴォリ・ジャズ (Tivoli Jazz)、ラヴェンナ・フェスティバル (Ravenna Festival)、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル (Rossini Opera Festival) などイタリア全土のジャズやクラシックのフェスティバル、音楽祭のみならず、フランス、オーストリア、ドイツをはじめとするヨーロッパはもちろん、ロシア、インド、日本など、世界各地のより重要な国際フェスティバルに参加している。

彼はまた、デンマークのピアニスト、トーマス・クラウセン (Thomas Clausen)、イタリアのサックス・クラリネット奏者で作曲家のジャンルイージ・トロヴェージ (Gianluigi Trovesi)、アルゼンチンのサクソフォン奏者で、作曲、アレンジ、フルート、クラリネットなど多才を誇る、ハヴィエル・ジロット (Javier Girotto)、イタリアのトランペット奏者のマルコ・タンブリーニ (Marco Tamburini)、クロアチアの歌手、タマラ・オブロバ (Tamara Obrovac)、イタリアのサクソフォン奏者、マリオ・マルツィ (Mario Marzi)、アメリカのジャズ・ピアニスト、ビル・エヴァンス (Bill Evans)、同じくアメリカのドラマー、アダム・ナスバウム (Adam Nussbaum) など、異なるジャンルで、国際的名声を誇る世界各地の奏者との共演を誇っている。

1999年からは、ミラノ・スカラ座のソリストを主体として結成された“スカラ室内管弦楽団”のメンバーとしても活躍し、世界各地でのツアーにも定期的に参加している。

ザンキーニはまた、コンサート活動、研究の分野において後進の指導も行っており、アコーディオンと即興の分野でワークショップを開催するなどしている。

1996年以来、彼は、約20枚に及ぶCDを発表しており、その中の主だったものをあげると、2006年発表の“Bebop Buffet” (Wind Sound) は、フランク・マロッコ (Frank Marocco) とのデュオで、アコーディオンにおける明確なビバップとして手本とも言えるディスクである。2009年に発表した“Meglio Solo!” (Sulta Records) では、特別なMIDIアコーディオンとライブエレクトロニクス、そしてラップ

ップトップを駆使し、楽器の音色の可能性を探求した意欲作である。また、同年には、ジャズ・アコーディオンの最大の功労者の一人で、偉大なるマエスト、アート・ヴァン・ダム (Art Van Damme)へのオマージュとして、ザンキーニ初のトリビュート・アルバム“Fuga per Art 5et” (Dodici Lune Records) も発表している。2010年の9月リリースの“The way we talk” (In+Out Records) は、ギターに Ratko Zjaca、ダブル・ベースにマーティン・グジャコノスキ (Martin Gjakonovski)、ドラムにアダム・ナスバウム (Adam Nussbaum) と、ヨーロッパ、アメリカの奏者たちとの国際的なカルテットによる作品である。また、2012年の5月に発表された“My Accordion's Concept” (Sulta Records) は、アコースティック・アコーディオンとライブエレクトロニクスによるラジカルな即興で組み立てるプロジェクトで、アコーディオンにおける表現の常識を覆そうという、ザンキーニならではの大膽な企てである。また、2015年には、イタリア・ロマーニャの作曲家・セコンド・カサデイ (Secondo Casadei) の誰もが知るメロディーを現代的な視点で再考し、マエストロに捧げたアルバム“CADADEI SECONDO me”をリリースしている。